

地域社会と連携した「学生主導型」交換 留学生インターンシップの挑戦

—地域再生への貢献と留学生のエンパワーメント— Challenge of ‘Student-centered’ Internship for International Exchange Students in Cooperation with Local Society: Contribution to the Revitalization of Local Society and Empowerment of International Students

広島大学国際センター国際教育部門 恒松 直美

TSUNEMATSU Naomi

(Associate Professor, International Center: International Education Division,
Hiroshima University)

キーワード：交換留学生、インターンシップ、地域再生、グローバル社会

はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program, HUSAプログラム)¹において、交換留学生向けに開講している「グローバル化支援インターンシップ」に焦点をあて、その全体像について概説するとともに、その意義と今後の方向性についてまとめる。2012年度より「派遣型」インターンシップから「学生主導型」インターンシップへとパラダイム転換し、交換留学生インターンは「グローバル化支援プロジェクト」に挑戦してきた。HUSAプログラム留学生向けインターンシップを2003年度に初めて開講し、2011年度までは市役所と地域企業に2週間インターンを派遣する「派遣型」であった。新しい「グローバル化支援インターンシップ」は、留学生インターンが国際的知見を生かし、「主体」として地域再生に貢献しつつ社会体験を持つ授業である。本授業は、留学生インターンが大学の学術知を日本社会で実践知として生かしながら地域社会の課題に取り組み、実践を通じてリーダーシップやマネジメント

¹「広島大学短期交換留学プログラム」(HUSAプログラム)の詳細はプログラムのホームページを参照。24ヶ国(北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジア)に渡る66大学とUSAC(University Studies Abroad Consortium)及びUMAP(University Mobility in Asia and the Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結している(2013年11月時点)。

力を養うアクティブ・ラーニングの場となっている。2012年度に「グローバル化支援インターンシップ」を新しく開講して以来、多国籍の交換留学生の持つ異文化性を生かした体験型学習の場を創り、留学生の多角的知見を地域社会に貢献するとともに、地域社会の異文化理解を促進してきた。

交換留学生向けのインターンシップに関する研究はまだ十分に発展していない。多くの留学生インターンシップは、日本人学生と同じ枠組みで日本語で行われることが多い。日本企業による留学生に特化した就職セミナーも、日本人向けとほぼ同様に日本語で広報や説明会が行われることが多い。要求される日本語レベルは日本語能力試験N1レベル程度と記載されるなど、外国人採用には日本語能力と日本のビジネス習慣や企業風土の理解が必要条件とされる傾向にある。日本企業の外国人採用における優秀な人材要件は、日本語能力が最重要項目であることがよく指摘される(守屋: 2012)。日本の企業が求めているのは、留学生の持つ語学力、人材の多様性、海外業務への発展への対応力、国際性、などグローバル化への対応に役立つ人材要件であると同時に、日本語能力が最重要項目であることに鑑みれば、日本語能力と日本理解を前提としたうえで、国際的人材としての能力に価値がおかれているとも言える。「グローバル化支援インターンシップ」の授業では、留学生の持つ異文化性と日本の地域社会にある日本的価値観をどうつなげるかが常に理論的課題であり続けてきた。「派遣型」では留学生インターンが主体となり得ない状況を打破し、インターンがエンパワーメントするインターンシップに転換するため、2012年度に留学生インターンがチームで「グローバル化支援プロジェクト」に取り組む「学生主導型」インターンシップへとパラダイム転換した。その背景にある課題について論じ、学生主導型でプロジェクトを行うための学生の動機づけの重要性と実習の取り組みを紹介する。²

「派遣型」から「学生主導型」へのパラダイム転換-留学生の異文化性と日本社会の地域特殊性-

現在、広島大学短期交換留学生向け「グローバル化支援インターンシップ」と地域の観光振興とを連携させられるよう地域と協働で本インターンシップの企画を検討している。本授業は、9月末の交換留学生の来日直後の秋学期のみ開講する「グローバル化支援インターンシップ I: キャリア理論と実践」と秋学期・春学期の通年で行う「グローバル化支援インターンシップ II: 実習」の2部で構成される。10月の第1週に「インターンシップ・プレースメント・テスト」(筆記試験と面接試験)を行い、留学生の日本語による実務能力を判定する。2週間地域企業等にインターンを派遣する「派遣型」では、インターンが顧客的存在になる傾向にあり、自主的に仕事に取り組むことが少なく、学生のモチベーションも上がりにくかった。受け入れ側も、採用に結びつかない留学生インターンのための実習プログラムを組むことは負担であり、モチベーションは低かった。就職活動の厳しさも未体験の留学生インターンが、自身の実務能力を把握せず現場での活躍を期待することも多々あり、そのための対応策が必要となった。交換留学生が日本留学中のインターンシップで目指す達成目標の明確化と教育成果の再検討を行った結果、2012年度にインターンが「主体」となり企画を進める授業へとパラダイム転換を図ることとした。「グローバル化支援プロジェクト」を交換留学生が主導で進める挑戦の始まりである。

担当教員にとり、「学生主導型」交換留学生インターンシップの大きな挑戦は、日本の地域社会

² 「グローバル化支援インターンシップ」授業の詳細については、恒松の研究ホームページ(アドレスは引用文献に記載)を参照。

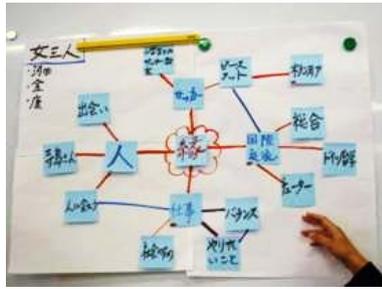
で機能する日本的価値観と多国籍の留学生の持つ多様な価値観をどう統合し折り合いをつけるかである。日本的価値観を持つ地域の人々と異なる文化の価値観を持つ留学生が会う仕事の現場で双方のバランスをどうとるのか、「派遣型」からシフトし、留学生インターンが「主体」となりエンパワーメントして力を発揮する「学生主導型」インターンシップは本当に可能なのか、模索が続いた。結論は、「留学生らしさ」のアイデンティティと交換留学生が持つ日本への強い興味を交換留学生インターンの貴重な特性として活かす道であった。そのフレームワークでプロジェクトを進める時、留学生インターンはプロジェクトの「主体」となりリーダーシップを発揮する。

「期待マネジメント」の重要性と「グローバル化支援プロジェクト」実習のための準備

社会体験のない交換留学生インターンが日本社会で仕事をするためには「期待マネジメント」が不可欠である（恒松：2013a）。国際体験を持つ担当教員の授業は文化の多様性が受容される学習環境であるが、大学外の地域社会は日本的価値観に基づいてものが機能している。そのギャップの調整は本授業の重要な理論的課題である（恒松：2013b）。インターンシップの授業では、留学生インターンが担当教員と英語で対等に話したり、個人主義的発想から自由に意見を述べたりすることを受容し、異文化コミュニケーションを体験で学ぶ教育環境を作っている。それに対し、大学外の地域社会では、特別な設定でない限り、「日本的価値観」に基づいた行動が期待される。仲介者がいない場合、日本語を話さず地域でインターンシップや仕事をするのは不可能に近い。「期待マネジメント」は、その現実をインターンが認識する機会をもたらし、日本の実社会で自分が受容され得るかどうかを考える機会となる。

第一段階の「期待マネジメント」として、授業開始時の10月第1週の授業で、日本社会で仕事をするために必要な日本語能力及び実務能力を留学生に認識してもらうことと受講者の決定を目的とする「インターンシップ・プレースメントテスト」を行う。本試験は、実務能力をテストする筆記試験と面接試験の2部で構成される。筆記試験は、実際の仕事の現場での判断力、書類作成能力、状況対応能力、電話対応能力等を審査する内容で難易度は高い。面接試験では、実際の仕事の状況を設定し電話対応を行ってもらう。本試験により、留学生インターンは仕事で必要とされる実務能力の高さと自身の能力不足を認識することとなる。日本語能力試験N1に既に合格し自信を持っている留学生も、実務能力のレベルの高さを思い知ることとなる。

第2の「期待マネジメント」として、10月～12月に企業や市役所から社会人講師を招聘して様々な仕事やその意味について学ぶ「社会体験者講話」を全学公開で開催し、次週に講話に基づくPBL(Problem-based-Learning「課題発見解決型学習」)を行っている（恒松：2011）。さらに、第3の「期待マネジメント」として、11月～12月に全学募集による「グループ・ディスカッション」セミナーを開催し、日本語で議論し発表する力を試す場を作っている。与えられたテーマについてグループで議論してまとめ、日本語でプレゼンテーションする。取り組んだテーマは、「グローバル人材」・「地域社会のグローバル化への対応策」・「ITがコミュニケーションにもたらした功罪」などである。ディスカッションを「社会体験者講話」の後に行い、招聘した社会人講師に評価指標を提示し担当教員と評価を行う。インターンには講師よりフィードバックを行う。PBL協同学習は、「講話」に基づき、次週に行う設定である。



PBL 協同学習プレゼンテーション



グループ・ディスカッション

交換留学生在が地域社会の人々とプロジェクトを進めていくためには、仕事を日本語で行うレベルの高さを身をもって体験することが必要不可欠である。期待マネジメントを体験した留学生は、自身の実務能力を認識する。「グローバル化支援プロジェクト」では、企業・市役所・外部組織との電話や電子メールでの対応、議事録作成、書類作成、会議後の連絡、プロジェクト進行の報告など、実務能力が欠かせない。学生が自身の日本語能力を認識したうえで受講を強く要望した場合は、日本語中級レベルでも「グローバル化支援インターンシップ I: キャリア理論と実践」の授業の受講を許可している。2012年度・2013年度とも日本語中級のヨーロッパ出身の学生が本授業を受講し、実習にも加わったが、西洋的発想から異なる価値観で意見を述べたり、英語資料の作成に貢献するなど、本授業に新しい展開をもたらしている。多様な国籍の留学生インターンの参加は、文化の多様性の現実を地域の人々が知る一歩ともなる。

内発的動機づけと自己効力感による留学生インターンのエンパワーメント

「学生主導型」インターンシップ構築のためには、留学生インターンの動機づけが必要条件となる。自己効力感とエンパワーメントがインターンの意欲とプロジェクト成功に向けて努力するかどうかを左右する。自分の知識が日本社会で生かされる実感を持たせた時、留学生インターンはプロジェクトを動かそうと努力する。外国人としてのアイデンティティが尊重され、日本語能力・日本文化理解が実践知として生かされる場の体験により、インターンは仕事を創意工夫して行い、辛抱強さと根気をみせる。強い動機づけがインターンの主体的行動を起こすのである(恒松:2012a)。

2012年から2年連続で、「II」の実習の単位を未取得の留学生インターンが、日本語が中級レベルのため実習の授業の受講資格を与えなかったにも関わらず、プロジェクトでリーダーシップを発揮し他のインターンを支援し続けた。チームでプロジェクトを組めば留学生の持つ多様な能力を生かせることを証明した例である。その留学生の1人は、単位取得は重要ではなく、プロジェクトで自分がリーダーシップを発揮し進める必要性を感じたと述べた。多大な時間と労力を使い、単位未取得の学生が貢献する理由の背景には、1年という限りのある留学期間中に大学外の日本社会と接する機会を持つことへの強い価値づけがある。留学生インターンの動機づけには、留学生としての特性を生かして自身の知見を日本社会に貢献することによる自己効力感とエンパワーメントが深く関与している。

現在、留学生インターンのエンパワーメントの要因について、インターンにインタビューを行い考察を行っている。例えば、後述する2013-2014年度の「東広島市民レポーター」プロジェクトで、留学生インターンが限界に挑戦し、自ら仕事を作り出し、自主的に動いた理由は何であったのか。自身の日本語能力と留学生としての視点が尊重され、市役所との連携で対等な立場にた

って意見を述べ、決定権を持ち、正式にプロジェクトを動かす場を持てることから感じる有能感について指摘したインターンがいた。市役所職員や企業人などの大学外の社会人と対等の立場で「仕事」をする体験は通常持てない中、稀有の体験を持てたと述べた。指導教員の監督下、他の留学生が容易に模倣できない形で実社会で実践に挑戦していることに誇りを感じたとの感想もあった。学生主導で動かす原動力となるのは、インターンの内発的動機づけであり、厳しい訓練と指導に耐えるだけの十分な動機づけがない場合は継続が困難となる。教員による強制や統制でインターンを動かすことはできず、インターンの強い動機づけと、インターンの力を引き出しエンパワーメントさせる指導を教員が行うかどうか、学生主導インターンシップの鍵を握っている。

地域社会にある文化的資産を世界に開く施策と地域の人々による交換留学生インターンの受容

現在、人口減少により自治体としての存続が厳しい地域が増えている中、大学と連携した地域活性化政策の重要性が日々論じられている。地域社会にある伝統文化や文化的資産を新しい視点から発掘し、地域社会を世界に開く施策に留学生インターンが貢献できることに着目したい。地域にある貴重な資源や文化的・伝統的資産の多くが、国際的に広報されないまま埋没している。例えば、地域の多くの伝統的行事は、日本語でしか広報されず、大多数の留学生はその情報を知ることができない。その外国人の「声」を地域に届け、地域を世界につなげられるのが「留学生インターン」である。「外部者」であり「海外から来た留学生」であるからこそ、その気づきは新鮮であり、その声は注目される。留学生が日本語を努力して話し、日本社会に興味を示す時、地域の人々も心を開き、留学生インターンを受け入れ、共に地域社会を世界に開くために動こうとする。同時に、自身の価値感が受容されることを知った留学生はエンパワーメントし変容する。

地域社会の人々が最もインパクトを受けるのは、目の前で、留学生が日本社会について真剣に考え、日本人とは異なる視点や意見を主張する場面を見た時である。交換留学生の持つ一人の外国人としての「個人的」見解を、単なる個人的意見にとどまらず、国際的視点として地域を世界に開くために貢献できる。筒井（2013：73）は、学生が個人的側面からものごとを見る傾向にあることを述べ、学生の視点を「個人的視点から社会的視点」に変える教育の重要性について論じる。個人的視点から社会的視点への転換により、フランシスコ（2013：41）の述べる「大学の学際的アプローチがその地域にとり解放の源泉となる」場が構築できる。地域の課題に取り組む実践の場で留学生と地域の人々が真剣に向き合う時、真の異文化間コミュニケーションが生まれ、草の根での国際交流の可能性をも拡大する。

地域社会と連携した交換留学生主導型「グローバル化支援プロジェクト」実習

2012年度に新パラダイムで開始した「グローバル化支援インターンシップ」で取り組んできた「グローバル支援プロジェクト」の実践についてまとめる。2012-2013年度は、中国4人・台湾2人・オーストラリア1人・イタリア1人の合計8人の留学生が「グローバル化支援インターンシップⅠ：キャリア理論と実践」を受講し、そのうち6人が「グローバル化支援インターンシップⅡ：実践」を受講した。2013-2014年度は、韓国・中国・フィリピン・アメリカ・ポーランド出身の9人が「Ⅰ」を受講し、そのうち7人が「Ⅱ」を受講した。広島大学短期交換留学プログラム留学生の専攻は、日本語、日本文学、日本語翻訳通訳、日本研究、言語学、教育学、人類学、フランス

語、ビジネス、マネージメント、電子工学、材料工学、建築、物理学など多岐に渡る。専攻分野の多様性は、本インターンシップのプロジェクトの多角的発展の可能性を示唆している。2012-2013年度及び2013-2014年度に行ったプロジェクトは以下の通りである。

- 1) 「東広島市市民レポーター」プロジェクト (2013-2014年度)
- 2) 「国際交流歴史ツアー・コーディネーター」インターンシップ (2012-2013, 2013-2014年度)
- 3) 「地域国際観光プランナー」インターンシップ (2013-2014年度)
- 4) 地域企業のグローバル化支援市場調査 (2012-2013年度)
- 5) スクール・インターン (広島大学付属高校スーパーサイエンス・ハイスクール)
(2011-2012年度, 2012-2013年度)

1)の「東広島市市民レポーター」プロジェクトは、広島大学のある東広島市を外国人向けに広報し、来日に備え住みやすい街としてアピールする動画を作成する企画である。企画会議を重ねて動画作成を決定し、各自が作成案を提出後、動画内容の検討を重ねて詳細を決定した。東広島市内で開催される外国人支援のための国際交流会の撮影、広島大学キャンパスでの学生へのインタビューと東広島市の風景の撮影など、チームで撮影を分担し、最終的に約10分の動画に編集した。



東広島市役所と広島大学における企画会議・プレゼンテーション

2)の「国際交流歴史ツアー・コーディネーター」インターンシップは、インターン自身の属する「広島大学短期交換留学プログラム」交換留学生向けの「国際交流歴史ツアー」をインターンが企画・実行するものである。2013年度は「江田島国際交流歴史ツアー」、2014年度は「倉橋・江田島国際交流歴史ツアー」を行った(恒松:2014)。2014年度は、呉市立倉橋中学校(生徒・教職員・PTA・保護者)との国際交流会を盛り込んで内容を充実させ、第2回目の江田島市との国際交流会も行った。倉橋中学校との国際交流会は、司会・進行を担当教員が英語と日本語で行い、言語能力も多様で多国籍の留学生に臨機応変に対応しつつ進行し、日本語能力の多様な約30名の交換留学生と国際交流に慣れていない中学校生徒及び保護者との国際交流を可能にした。このような大規模な国際交流は前代未聞の行事であり、中学生にもかなり大きなインパクトを与えていることがアンケート調査から明らかとなった。来年度の開催を強く要望する声があり、「一生に一回の経験だと今日は感動した」との中学生からのコメントもあった。

国際交流会は、留学生スピーチ(日本語)、各グループごとの自己紹介(英語と日本語)、全体での質疑応答(英語と日本語)、伝言ゲーム(英語と日本語)など多彩な内容を盛り込んだ。160名もの参加者を動員するにあたり、全体で進行する部分と各グループごとのアクティビティとに分類し、インタラクションが増える工夫をした。本ツアーの企画と実行のプロセスを経て、ツアー企画の仕事の大変さを学習したとの意見がインターンからあった。企画会議から開始し、経路

確認と決定、広報、参加者リスト作成、スピーチ準備、詳細なインターンの役割分担、会場の確認、バス会社との連絡など、ツアー企画の全般にわたる内容を学び参画した。「配布物を見る目が変わった。それを作った人の労力を考えて捨てることができなくなった」というインターンのコメントは、苦勞して企画を実施した後に発せられたインターンの声である。



「倉橋・江田島国際交流歴史ツアー」における広島大学短期交換留学プログラム留学生と呉市立倉橋中学校との国際交流会（2014年4月26日）[左上は倉橋「長門の造船歴史館」前]

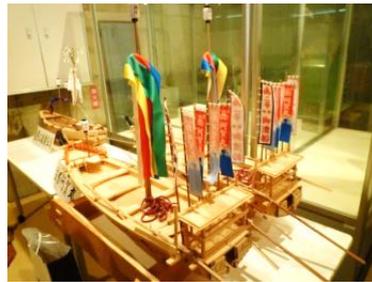
3)の「地域国際観光プランナー」インターンシップは、留学生インターンの多様な文化的知見をもとに地域の観光の国際的発展のための支援を行うものである。2013年度は、江田島市における「外国人民泊」の支援を行った。「異文化理解講座」や「英会話セミナー」に挑戦し、留学生インターンが宿泊する外国人の視点から助言を行った。江田島市は地域活性化のために「民泊型修学旅行」を積極的に推進し、修学旅行生が民家に宿泊し農業体験や漁業体験する企画を進めている（江田島市ホームページ）。2014年度は、呉市倉橋町の「長門の造船歴史館」の国際観光ガイド・インターンシップを企画しており、呉市産業部観光振興課の協力を得て検討会議を持っている。交換留学生インターンが、1. 地域の国際観光プランナーとして国際観光ガイドに挑戦、2. 地域の国際観光プランナーの育成支援、の2つに取り組むことを提案している。

2014年5月には広島大学にて「地域国際化貢献セミナー」を開催し、呉市産業部観光振興課、江田島市企画部交流促進課、呉市倉橋「長門の造船歴史館」からも参加を得、留学生インターン、広島大学短期交換留学生、日本人学生を交え、地域社会とグローバル化への対応支援策について検討した。授業担当教員による「初級英会話セミナー」も行い、参加者全員で英会話実践の楽しさを体験した。

本プロジェクトは、地域社会に生きる人々と留学生をつなぎ、留学生の国際的知見を生かして地域社会の国際的観光振興の促進に貢献し、地域の人々が異文化を体験する場を構築する新しい地域づくりを目指す。日本の地域社会が抱える課題を研究し改善策を提案するアクション・リサ



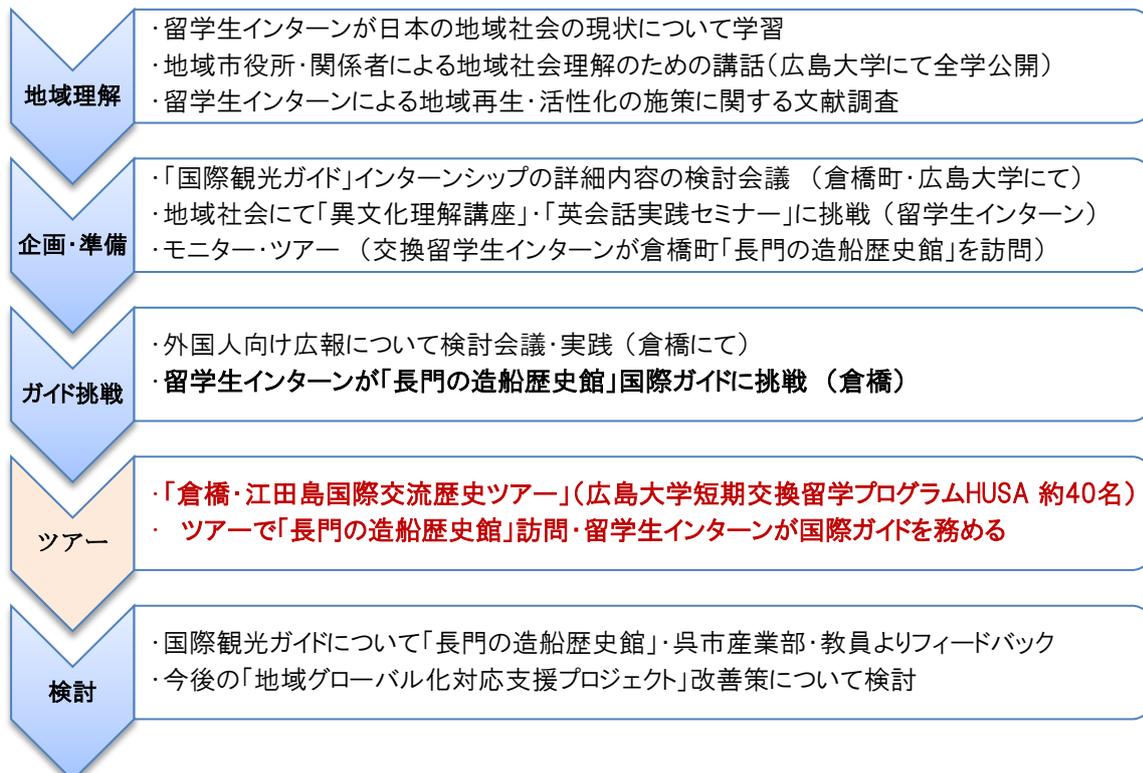
「地域国際化貢献セミナー」(2014年5月16日 広島大学国際センター)



呉市倉橋町「長門の造船歴史館」

一歩にも発展できる。「グローバル社会」の実態が見えにくい地域社会において留学生インターンの参画はグローバル社会を実感する場をもたらす。地域にある文化的資産を世界に広める「地域国際観光プランナー」は留学生と地域を強い絆で結ぶ。以下にインターンの1年の仕事の流れを示した。

図1. 「国際観光ガイド・インターンシップ」 1年間の流れ



4)は、**地域企業に関するグローバル化支援のための市場調査**である。2012-2013年度は、東広島

市にある地域企業のグローバル戦略支援のためのグローバル市場調査を行った。企業の商品に関して多国籍の顧客が持つイメージについて調査し、企業にてプレゼンテーションを行った。留学生を持つグローバル・ネットワークを生かし、外国人の见解を知る重要な調査となった。



地域企業でのプレゼンテーション・会議



広島大学附属高等学校にて

5)は、**広島大学附属高等学校の「スーパーサイエンス・ハイスクール」プロジェクトのスクール・インターン**である。高校生が科学に関する研究に国際的視野から取り組む力をつけるための支援を行った。異文化理解の促進と国際的な場での研究発表の力をつけることを目標とし、留学生インターンが日本語・英語でプレゼンテーションし、質疑応答する場を持った。外国人が日本語で話す姿や、日本語と英語の両方とも母国語でない留学生が日本語と英語で発表する姿を見るだけでも高校生には刺激のある学びとなった様子である。

今後 - 留学生の力で地域社会のグローバル化対応を支えるインターンシップ

最後に、3)で紹介した、企画実現に向け準備を進めている「**地域国際観光プランナー**」インターンシップについて述べる。2014年4月に開催した呉市立倉橋中学校生徒及び保護者との国際交流会の体験が、中学生と保護者・学校関係者・地域の人々の心を変容しつつある手応えを感じている。地域をグローバル社会と結ぶことを目指す本授業の一連の取り組みに支援の声が強まっている。「グローバル化支援プロジェクト」の一連の取り組みの中で発展させている「**地域グローバル化対応支援**」プロジェクトは、今後も多角的に地域社会の課題に貢献できる。その中でも、地域の国際観光振興に貢献する「**地域国際観光プランナー**」インターンシップを2014年度発展させる。その目標は以下に集約できる。

- 1) 交換留学生が、地域社会・地域学校と協力し、大学で学んだ学術知を日本社会における実践知に生かしつつ、地域社会における異文化理解を促進するとともに、地域の国際観光振興に貢献する。交換留学生の多様性と国際性を生かし、国際的知見を未来の地域づくりや地域活性化政策に生かし、地域社会を世界とつなぐ。
- 2) グローバルな視野から問題解決能力やマネジメント能力、異文化間コミュニケーション能力をつける。リーダーシップを発揮して、文化的多様性を背景に持つ人々と共存して生きていく力をはぐくむ。

交換留学生による地域社会・地域学校への貢献は以下に集約される。

交換留学生



地域社会・地域学校

1. 地域の課題・地域資源の発掘、新しい発見・指摘
2. 若者・外部者との交流により多様な意見を取り入れる重要性の認識の場の構築
3. 外部者との交流による地域学校関係者・地域内の人・団体への刺激
4. 外国人の知見を導入し国際的視野から地域学校運営・地域活性化を考える場の構築
5. UIターン³のきっかけ作り（外国人の移住も想定）
6. 地域学校・地域社会の国際的PR（世界への広報）
7. 地域学校と地域づくり・地域活性化・地域再生へのアイデア提案
8. 多文化共生社会を築く支援・グローバルレベルでの協働ネットワーク構築
9. アクション・リサーチの導入により、長期的視野から地域の課題をグローバルな視野から研究し、研究成果を地域に還元

地域社会・地域学校からの交換留学生への貢献は以下に集約される。

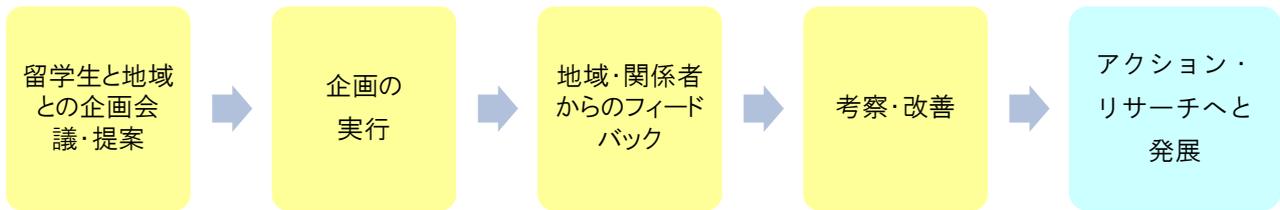


1. **交換留学生インターンが「地域国際観光プランナー」を体験する場の提供**
 - 経験豊富な社会人・学校関係者と留学生インターンの企画会議を体験
 - 多様な経験・キャリアを持つ地域の人々との出会いの場の提供
 - 地域学校・地域社会の課題等について留学生が学ぶ機会の提供
 - 地域づくり活動の補助や運営に参加し、運営方法を学ぶ場の提供
 - 日本語を使用して、地域の人々と企画を進める力を養う場の提供
 - コミュニケーション・情報収集・問題発見の能力を養う場の提供
 - 大学での日本語・日本文化の学びを地域の人々との交流で生かす場の提供
2. **交換留学生インターンが地域社会で「地域国際観光プランナー」育成支援に携わる場の提供**
 - 地域の人々の異文化理解を促進するためのセミナーなどを開催
 - 地域の文化的資産について研究し外国人の知見を発表する場の提供
 - 地域を国際的に開く施策と人材育成についてのアイデア・助言を行う場の提供
3. **交換留学生インターンが国際交流会・ホームステイを企画し参加する場の提供**
 - 地域学校や地域の人々と連携して国際交流会やホームステイを企画し自身も参加する場の提供（留学生インターンのホームステイ企画と参加は重要）
 - 農業体験、漁業体験、地域文化体験、アウトドア、自然観察、伝統工芸、祭りへの参加など、学校教育への参画と地域文化の体験の場の提供
 - 交換留学生と日本の地域社会の人々とのつながりの構築と留学生が日本を再訪問した際のふるさとの創出

「地域国際観光プランナー」インターンシップの流れは以下のようになる。

³ 都市圏の居住者が地方に移住する動き（Uターン、Iターン、Jターン）の総称。

図 2. 「地域国際観光プランナー」インターンシップの流れ



地域社会の活性化政策と地域のグローバル化対応への支援とを関連づけることにより、留学生インターンの力が大いに生かされる場が構築できる。留学生が地域と協働でプロジェクトに取り組む「学生主導型」の「グローバル化支援インターンシップ」授業で見えてきたのは、地域社会では「グローバル化」の現実的意味が捉えにくく、地域で何をすればよいのかが掴みにくい現実である。交換留学生インターンが日本に強い関心を示し、日本の人々と関わることを要望していることは、地域の人々にとり新しい発見であり、驚きであることも多い。初めは「戸惑い」から始まるが、交流の機会を持ち、言葉を交わし、人として接してみると、地域の人々は変容し、「また来てほしい」「もっとこのような機会を創ってほしい」などの強い要望の声を発する。そして、本インターンシップを進める過程で、地域の様々な場所で支援に関わることを希望している人に出会い始める。交換留学生は、日本の大学への1年の交換留学により多面的に意識を変容させ、インターンシップの体験は学生の将来に影響を与えている（恒松：2012b）。交換留学生と地域社会とを結ぶ「グローバル化支援インターンシップ」授業を、絶えず出てくる新しい課題と向き合いつつ、新しい展開に対応しながら、交換留学生インターンを「主体」として、今後も発展させていく。

引用文献

- 守屋貴司 (2012) 「日本企業の留学生などの外国人採用への一考察」『日本労働研究雑誌』（特集「グローバル経営と人材育成」）第 623 号, June, pp.29-36.
- 江田島市ホームページ <http://www.city.etajima.hiroshima.jp/cms/categories/show/165> (2014年7月1日閲覧)
- 恒松直美 (2014) 「交換留学生向け『グローバル化支援インターンシップ』実習－『国際交流歴史ツアー』コーディネーター育成－」『広島大学国際センター紀要』第 4 号, pp.1-15.
- 恒松直美 (2013a) 「交換留学生向け『グローバル化支援インターンシップ』授業の運営方法の転換と期待マネジメント」『広島大学留学生教育』第 17 号, pp.1-15.
- 恒松直美 (2013b) 「交換留学生向け『グローバル化支援インターンシップ』－留学生の異文化性と日本社会の地域特殊性－」『広島大学国際センター紀要』第 3 号, pp.1-14.
- 恒松直美 (2012a) 「省察的実践と『グローバル化支援インターンシップ』－フェミニズム理論とエンパワーメントのパラダイム－」『広島大学留学生教育』第 16 号, pp.1-15.
- 恒松直美 (2012b) 「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』第 17 号, pp.51-60.
- 恒松直美 (2011) 「短期交換留学生向けインターンシップ授業における企業体験者講話と PBL (課題発見解決型学習)」『広島大学留学生教育』第 15 号, pp.47-61.
- 恒松直美 研究ホームページ <http://home.hiroshima-u.ac.jp/ntsunema/index.html>
- 筒井美紀 (2013) 「個人的なものから社会的なものへ－私たちは学生をその高みに押し上げる－」『グローバル化のなかの大学－教育は社会を再生する力をはぐくむか－』上智

- 大学グローバル・コンサーン研究所・国際基督教大学社会科学研究所共編,
pp.66-74.
- 広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program, HUSA)
ホームページ http://www.hiroshima-u.ac.jp/en/husaprogram_incoming (2014年7月
1日閲覧)
- フランシスコ・デ・ルー (2013)「大学の社会的責任」『グローバル化のなかの大学 - 教育は
社会を再生する力をはぐくむか - 』上智大学グローバル・コンサーン研究所・
国際基督教大学社会科学研究所共編, pp.31-49.